

経営情報学会 2026 年度年次大会報告

四本雅人（よつもと まさと）長崎県立大学
高木俊雄（たかぎ としお）横浜市立大学
布施匡章（ふせ まさあき）近畿大学

1. 大会概要

2026 年度の年次大会が、2026 年 6 月 6 日（土）の午後に Zoom とバーチャル空間 oVice を使い、「経営情報におけるセキュリティマネジメント」をテーマとして開催されました。今回の大会では、林郁也氏（日本シーサート協議会・運営委員会委員長；NTT セキュリティジャパン、NTT-CERT）をお招きしての招待講演、井上直幸氏（筑波大学大学院）による学会賞受賞者講演、ポスター発表セッションのプログラムが設けられました。昨年に続き、今年度も招待講演と学会賞受賞講演は Zoom、ポスター発表セッションは oVice で開催いたしました。大会には 183 名もの多くの皆様にお申込みをいただきました。

2. 招待講演

今大会の招待講演では、日本シーサート協議会・運営委員会委員長の林郁也氏に「経営情報をめぐるサイバーセキュリティの矛と盾」のタイトルでご講演をしていただきました。サイバーセキュリティの基本的な考え方から始まり、企業へのサイバー攻撃・インフラへのサイバー攻撃・病院へのサイバー攻撃・人々の認知へのサイバー攻撃（サイバー空間

を利用使用した情報戦）に関する事例をご紹介されました。そして、なぜ、こうしたことが起こるのか、何が今までと違うのかについて、「サイバー空間」という新たな社会領域が成立したこと、企業においては、インプットからアウトプットに至るまで、ほぼすべての箇所に IT システムが関わるようになったことを指摘されていました。そして、情報における監視と制御において、「情報を広く取り入れることは大切だが、適切でない情報が含まれているかもしれないので『扱わない』」のではなく、「ファクトチェックや専門家配置を行い、適切にカウンターナラティブを実施する」こと。「DX の促進は不可欠だが、セキュリティの観点では弱点になるかもしれないので採用しない」のではなく、「DX の促進は不可欠で、セキュリティ上の弱点になる部分を調べて多層防御する」こと。そして、「AI の利便性は認めるが、危険なので使わない」のではなく、「AI の圧倒的利便性を認め、上手な使い方を見出す」こととし、サイバーセキュリティの「矛と盾の統合」を提言されていました。

講演の最後には、本学会に対し、「経営情報学会の使命は、情報やコミュニケーションと経営の接点に関心を持つ研究者、実務家、および教育者に対して、企業、組織、社会、また個人の情報および情報技術の活用に関する対話の場を提供すること」で



林郁也氏による招待講演

まとめ ～ 未来に向けて

- いま、何がおこっているか
サイバー空間は、私たちの住む社会をいまやすっぽり取り囲み、そこへの影響は実社会にも大きな影響をもたらす
- これから、何がおこるか
人の五感や処理能力を超え、攻めは加速する
守りも加速しなければ立ち行かない
ただし、情報に踊らされず、落ち着きながら（正しく怖がる）
- セキュリティマネジメントは大事
経営を守り、活動を健全な社会発展へとつなげるために、
これからは矛盾（むじゅん）→たてはこ の駆使と、みんなの力のつながりを

39

林郁也氏によるご講演内容

「広範な方々が対話し、知を結集する素晴らしい機会」とのコメントを頂戴しました。

今現在、サイバーセキュリティの領域で生じているさまざまなサイバー攻撃について学ぶことができ、これからどう対処していくべきか（「正しく怖がる」という表現が印象的でした）、特にみんなでつながり、対話を続けていくことが必要であることを知りました。大変、興味深い講演でした。

3. 学会賞受賞講演

2025年度の学会賞は、井上直幸氏（筑波大学大学院ビジネス科学研究群）、木野泰伸氏（筑波大学ビジネスサイエンス系）、倉橋節也氏（筑波大学ビジネスサイエンス系）による「高齢者市場におけるイノベーション普及プロセスの構造分析」（『経営情報学会誌』第33巻、第4号、pp. 169-191）に決定しました。そこで本大会では、著者の井上直幸氏にこの論文内容について講演いただきました。

講演内容としては、論文に示されている通り、高齢化社会の進展に伴い、消費の担い手として高齢者への期待が高まる一方、高齢者層におけるインターネットを通じた消費活動が発展途上にある現代において、オンラインショッピングに焦点を当て、高齢者の知覚リスクと意思決定がイノベーション普及に及ぼす影響の分析を試みるものでした。分析ではプロスペクト理論を用いた意思決定とイノベーション普及モデルを組み合わせ、シミュレーションを行うことで、高齢者市場の成長メカニズムが明らかにされていました。

受賞、誠にありがとうございます。

4. ポスター発表セッション

本年度の年次大会でも、ポスター発表セッションではoViceを活用し、発表者と参加者が自由に意見を交換できる環境を整えました。今回は40件の応募があり、テーマも多岐にわたりましたが、AIやLLMに関連したテーマが多かったことが特徴的でした。ポスターセッション中は、参加者が自由にブースを回遊でき、参加者同士のディスカッションや質疑応答も活発に行われていました。

今年度の「優秀萌芽研究賞」には、以下の4件が



ポスター発表セッション

選出されました。

- ・宮田実奈氏（慶應義塾大学大学院）・高橋大志氏（慶應義塾大学大学院）「家計パネルデータに基づくクラスターリングとペルソナ設計の試み」
 - ・河手愛実氏（慶應義塾大学）・章子いく氏（三菱地所）・鈴木天心氏（慶應義塾大学）・保くりさ子氏（慶應義塾大学）・森野茉莉氏（慶應義塾大学）・清水たくみ氏（慶應義塾大学）「自己効力感を変動させる組織的文脈：大企業／スタートアップ間比較」
 - ・須藤優音氏（芝浦工業大学）・後藤裕介氏（芝浦工業大学）「管理者の対応不安を低減するLLM労務ヒアリング訓練システムにむけて」
 - ・ZHU BORUILONG氏（東京理科大学）・大江秋津氏（東京理科大学）「研究開発能力は取引先からのロックインを回避できるのか—資源依存論による自動車部品サプライヤーの取引の自律性—」
- こちらも受賞、おめでとうございます。

5. おわりに

年次大会は2020年の新型コロナの感染拡大以降、オンラインでの開催となり、近年は、現在のZoomによる講演会・oViceによるポスターセッションのスタイルが定着してきました。ポスターセッションにおいては、例年40件前後のお申し込みをいただいています。昨年度の大会報告でも記載されておりましたが、一部の会員の皆様からは年次大会に対して、対面方式での開催のご要望もいただいております。今後もこのスタイルに囚われることなく、大会の運営方法について検討していきたいと考えております。機会がございましたら、年次大会の感想など

を大会担当理事に寄せていただければ、今後の参考とさせていただきます。

最後に、今回の大会を無事終えることができたのも、講演者、発表者、参加者、そして準備に関わっ

てくださった多くの方々のご協力のおかげです。この場をお借りして、大会に関わってくださった皆様に御礼申し上げます。